The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	堂友の雑録
Author(s)	井口, 金次郎; 酒井, 全太郎; 中尾, 金彌 他
Citation	懐徳. 1958, 29, p. 79-87
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90328
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

堂友の雜錄

回想

井口金次郎

今日まで凡そ四十年の歳月が夢のやうに過ぎ去りました。當時の大阪で市民が儒學と文科、諸科學の聽講が出來たのは、只當懷德堂一箇處のみでありました。京都帝國大學の諸先生を主な講師として、連續十二回、毎週土曜日の午後六時より八時迄、二時間の講演が開かれましたので、市民の好學の多數の諸子は熱心に聽講に集りました。講義の科目は、文科と自然科學でありましたが、其中でも特に東洋史學は當時盛んなる時代であり、其講義は他の科題よりも多くありました。從つて當日は聽講者も特に多數でありました。其當時坂口昂先生の講義の題目は〔古代ギリシャの文化〕でありました。其序論に大阪町人學者の江戸時代に於ける業蹟を稱へ、英人史家グロートの例を擧げ、新しい町人學者の出現を諸子に期待すると結ばれました。それに答へられたのでしやうか、聽講生の一人が中國經濟研究の著書を出版せられました。恐らく今日も其道に精進して居らるる事と思ひます。今一人は佛教美術の研究で著述をなされました。しかし私は恥しながら今日に至る迄何の業蹟の一片も發表出來ず、眞に恐縮の至りでございます。何卒お許しを願ひます。故人となられました諸先生の御靈に、厚く御禮を捧げます。再建以來今日迄御盡力下さいました幹部の御一同樣へ厚く御禮申上げます。往時を回想致しまして、私の感懷を申し上げた次第で御座います。御堂今後一層の御發展をお祈り致します。

思ひ出

酒井全太郎

重建懷德堂も、早や四十餘年の永い年月を經た。その間よくも聽講に、又堂友と諸共に見學にと續いたものである。これは堂の持つ何か不思議の力に引かれたのでは

ないかと思ふ。然し自分が堂のことを知つたのは、僅かに新聞紙上で聽講生募集の廣告を見たのが最初であつて、極めて乏しい智識があつたのみである。それは年末頃であつたので、早速聽講の申出をした。そして開講は一月末であつたと思ふ。開講當日にはあの阿里山の檜材の香も新しい廣い講堂に、參列者や聽講生で一杯であつた。その後聽講を續けて居つたのであるが、ふと或る野心を起して暫く堂から離れて居つたのであつた。それから後に、又復聽講生となつて、現在に至つたのである。この間の樂しかつた思ひ出を記して見ようと思ふ。

○

何分にも思い出は、私事に涉ることが多くなることは免れない。又時には諸先生や堂友諸兄の事に觸れる場合もあるかも知れないが、この點はお許しを蒙りたい。

○

多くの講義を聽講した中で、今尙耳底に殘つて居るのは、西村（天囚）先生の講義であつた。先生はあの堂々たる巨軀で、音吐朗々と詩經の講義を進めて行かれた時には、何か身內が引きしまる樣に感じた。そして詩の章句を讀み終られ、一種かはつた講義は、實に忘れられない。又「孝は妻子に衰ふ」といふ講義は、極めて斷片的であつたが、今も新らしく記憶に蘇がへるのである。殊に自分は弱年で鄕關を出たので、親に奉養することを怠つておつたのであつたから、尙更感銘する所が深かつた。しかるに後日堂友のN氏が病母に奉仕されて、時には病母の言はれるまま、錢湯にも自分で背負つて行き、浴も共にされたといふやうなお話をきいて、自分が或年、老母を病床に見舞つても、十分に看護しなかつたことなどと思ひ合せて、慙愧に堪へないことであつた。それのみならずこの先生の敎は、現在にもあてはまるものであると考へて居る。

又經學の講義をききながらも、いつか小說類を耽讀することが多かつたので、謹嚴な松山先生は、「小說などを讀むもよいが、深入りしてはいけないよ」と懇々と敎訓されたのが、どうしたことか、この尊い遺訓を奉ずることが出來ないで、小說類に眼を通す方が經書を讀むよりも多いといふことは、實に先生に申譯ないことと思ふ。

○

堂の事務所の二階に會議室があつた。この西窓の下の壁ぎはに、長い安樂椅子があつた。この椅子は實に妙な椅子で、これに倚りかかると、實にゆつたりと、極めて安樂に、俗事を放散する樣な氣分になるのであつた。で講義後、先生と、ここで暫く話し合ふ時など、潛越にもこれにかけてお話をきいたこともあつた。

そして先生方と漫緩と話しながら、電車道を歩いたことも亦度々であつた。この時は極めて開放された話であつたやうに思ふ。

○

昭和になつてから「懐徳」の原稿のことで、狩野、内藤兩博士及び諸先生のお宅に堂友諸兄とお伺ひして、色々のお話を直接承つたことは、比べ様のない收獲であつた。

殊に風光明眉な瓶原の内藤先生を訪問する日の楽しかつたこと。そして先生の指示で海住山寺に登つたことなどは、忘れ難い思ひ出である。

○

支那事變から次第に戰局が擴大して、大東亞戰爭となつて、漸く戰爭の様相が變つて來て、燈火管制下での聽講程、意義深いものはなかつた。そして昭和二十年三月十四日の空襲で、一瞬にして、文華の殿堂である豪壯な懐徳堂も灰燼に歸して、僅かに書庫を殘すのみといふ有様であつたことは、何としても遺憾なことであつた。その後講義や祭典はこの燒殘りの書庫内で行はれたのであつた。何としても傳統と歴史のある文華の殿堂であつた懐徳堂が、戰爭のため失はれたことは、非常に大阪の文化の上に損失である。

しかし近年になつて大阪大學で、春秋二期に懐徳堂講座を持つ様になつたのは、吾々のありがたく思ふ所である。

古い歴史を有する懐徳堂は、不幸講義の場所を現在持たないが、經學や中國又は我國の古典研究熱が旺盛になつた現代では、一般に復講を希望する聲があるのではないかと思ふ。それに堂を永續させ盛んにならしめることは、種々畫策されて居ることと思ひ、力强く感ずるのである。希くば若い世代の人々が、十分に懐徳堂の精神を生かして、將來のために盡力して頂きたいのである。

懐徳堂に感謝する

中尾金彌

懐徳堂というと、すぐ私は、昔の北京か南京の、靜かな裏街などにある白か綠か碧の墨をいれた名筆の彫看板を連想したりするのである。何といつても私にとつては東洋學の味と、日本の古典味を湛えたなつかしい名稱なのである。

私は吉田松陰を生んだ長州に生れ、乃木大將の鄕里長府(現在は下關市内)で、中學時代五年を過ごし、青年將

校時代十餘年を、山陰の風流都市松江で暮したので、環境的影響からも懷德堂に親しみ易い素養をもつていたのであろう。その上に松江時代には、今は祀月書院と呼ぶ寺小屋の英才教育に關係したり、陸軍士官學校本科の所在地であつた相模原町では、相武台下座間塾という鄉學を起したり、又大陸の各地では中國人にも知己を求めたりした過去の經歷が、懷德の二字に愛着を持たせる私でた。終戰後人生變轉の運命は、私を東京から大阪え移住もあつせしめて、大阪を私の第二の故鄉とさせたのである。しかも、移り變る米國調狂噪の大阪の街の中に、懷德堂の現存を知つた私の喜びは限りないものがあつた。かくて、懷德堂春秋の講座が始まると、豐中市服部の自宅え急ぐ脚を逆に醫大の講堂え運んで、特別に支障の突發せぬ限りは聽講させて貰うのである。

サックドレスの斷髮女や、アロハシャツの青年が右往左往する混迷の夜、德川時代からの傳統を繼ぎ、創立されてから四十年にもなる懷德堂の講座は、閑かに、ゆるぎなく開かれるのである。この事實は日本文化という觀點からもゆかしく尊い限りであつて、眞に祝福すべきことではあるまいか？

私は講義をききながら考えたことがある。懷德堂は、猶文科大學の茶道教室のごときか？と。歐米化した複雜な都市に、茶道のように淡々とし、日本否東洋の學問が主體となつて講ぜられるからである。宗匠には當代一流の專門大家先生があり、茶器には天目や青磁にあたる中國の古代史や詩文があり、又古萩や古瀨戸にあたる日本の古典があり、新作物や外國物にあたる近代文學や、外國の視察談もある。茶室である講堂は窮屈で暗く、恰も草庵の茶室を思はせるが、懷德堂には相應しい。集る茶人ともいうべき聽講者は、教養ある市民、學生の老若男女で、各界層を網羅して、庶民的平等人である。蓋し私の茶道教室觀も、あながちの妄論ではあるまい。特に茶の味はに東洋と日本の味がするからである。

ただ、私はこのよい人々——向學求道の紳士淑女の一團が、名も知らず、挨拶も交はさずに、無緣の衆生として集散し去ることを遺憾に思うものである。講座は懷德であり、人々は有緣の同志である。會員のため春秋の慰安遠足の催しもあつて、色々考えて居られるようではあるが、この人々がお互に知り合い、結び合うということは、何か大きな推進力となり、文化的寄與にもなるのではないかと思う者である。最後に、私は、懷德堂に對して衷心より感謝の誠を捧げる。

（筆者は八洲自動車工業重役）

孔子祭の思ひ出

中川幸三

大正十一年は孔子歿後二千四百年に相當するので、この年の懐徳堂の恒祭に釋菜を行つた。

その儀案は松山先生が古式に稽えて作られ、孔子像はないから、新に木主を調製して祭壇に安置した。この木主には狩野先生が揮毫せられた。

享獻の執役は聽講生の中から選ばれた。これ等の人々は、幾夜となく集つて習禮をやつた。執饌の役の私等は舊懐徳堂門人の神山氏（堺市方違神社神官）大町氏（市内天満宮神官）二老から供饌の受授、手や足の運び、その他、細々した作法を教はつた。

かくて十月八日の當日、天氣は晴朗、仰ぐ秋空の色も美しかつた。恒例の來賓、その他參觀の客で廣い講堂も溢れんばかりであつた。

献の松山先生は唯一人フロックコート着用、これに從して紋付羽織袴姿の老若二十一人の執役は、雅樂の奏律に和して肅々と進退して、享獻の禮も滯りなく終つた。

この日の光景は翌日の大阪朝日新聞に記事され、寫眞さえも載せられた。その寫眞は献饌の最中を撮つたもので、壇上に、山本、高砂の兩人が、壇下で私と高梨氏とが第一俎を受授してゐるのを待構えてゐる所である。私は戰火でこの印畫は亡つたが誰かが保存されてゐるかも知れない。

執役の配當は、專ら松山先生が指定されたものであるが、各人の年齢、閲歴、性格などよく考慮に入れられてゐて、皆が終始愉快に從事し得たことも忘られない。

祝の小沼氏は最年長者であつたが、音吐朗々祝文を讀まれ、堂の隅々までよく聞えた。能樂殿の謠曲を錯覺した。又贊唱の岡田氏が威儀を正して號令をかけるやうな態度も印象が深い。とりわけ「胙（ヒモロギ）を賜ふ」の口調は、その當坐、諸生がお互に口まねして興し合つたことであつた。

しかし、これも今では三十六年前の昔話で、長老組の多くは、物故され、獨り井上正美氏のみが健在である。

猶釋菜の儀注は下記の通りで、二十一人の氏名も書き添えられてあり、そぞろに諸氏の面影が偲ばれる。

大正壬戌仲秋懷德堂釋菜儀注

享獻諸員列立於外庭。（堂外階下）首列贊唱一員。次列贊引一員・監祀一員・副監一員・祝二員・執尊一員・執洗一員・執篚一員・執罍一員。次列獻一員・贊禮一員・掌事二員・執饌八員・執俎一員・執籩一員。（掌事以下二列）次列贊引一員・聽講生廿一員。次列協律一員・樂人四員。以第一擊柝贊唱先入就本位。第二擊柝贊引・監祀・副監・祝・執尊・執洗・執篚・執罍入立於殿前。（以講壇擬殿）重行東面北上。（堂西面。故以北面西上。便宜從東面北上。）監祀・祝首側。副監・執尊次側。執洗・執篚・執罍殿側。立定。贊唱先再拜而唱再拜。監祀以下皆再拜。訖。贊引引監祀・副監。各就本位。祝及執尊升殿。執洗・執篚・執罍到洗所。各就本位。先是監祀等進入（中講堂）時。以第三擊柝贊禮引獻以下。就堂內假位。（以左右小講堂兩間擬門外）第四擊柝贊引引聽講生入。協律樂人次之。各就位。贊禮引獻以下。一列重行而入。各就本位。立定。贊唱唱再拜。衆在位者皆再拜。（其先拜者不拜）贊禮進獻之左。東面白。有司謹具請行事。退復位。樂作（迎神越天樂）三成樂止。贊唱曰。再拜。諸員在位者皆再拜。祝取幣於篚。出神位前北方。南面立。贊禮引獻升殿。進神位前。東面立。祝以幣南向授。獻受幣。樂作。（獻幣五常樂）贊禮引獻進。獻北面奠幣饌案上。少退北面再拜。贊禮引獻降復位。樂止。掌事（二員）帥執饌。（八員）向於饌所。（以講師休憩室充之）掌事進入饌所。執饌各自就其位。（殿上二員殿下六員）掌事授饌。執饌以次授受。自殿下及殿上。祝（二員）出迎於殿上。樂作。（獻饌慶雲樂）殿上執饌（一員）奠饌。第一俎（鯛）。第二俎（鯛）。第三俎（鯛）。第四籩（搗栗）。第五籩（梨子）。第六籩（葡萄）。第七豆（醃鴨）。第八豆（醃鱧）。第九豆（魚鮓）。第十簋（青菜）。第十一簋（黑白餅）。第十二簋（黍飯）。第十三簠（米飯）。第十四簠（稷飯）。第十五簠簋（黑白餅）。第十六簠（稻穗）。↑籩居右。豆居左。簋簠居其間。二俎橫而重於左。一俎特陳於右。以殿上狹隘。便宜先假置俎於饌案左。奠籩豆簋簠訖。奠俎於案前。奠饌訖。樂止。執饌掌事復位。祝還本位。贊禮引獻詣罍洗。執罍酌水。執洗取盤承水。獻盥手。執洗去盤水。執篚取巾於篚。進。獻拭手訖。執篚受巾奠於篚。遂取爵以進。獻受爵。執罍酌水。執洗承水。獻洗爵。執篚又取巾於篚進。獻拭爵訖。執篚受巾。奠於篚。執洗去盤水如初。而後奠盤。贊禮引獻升殿。詣尊所。奠爵於案上。執尊舉冪授尊。獻受尊。酌醴齊。樂作。（獻醴萬歲樂）贊禮引獻詣神前。獻東向奠爵。俛伏少退。東向立。樂止。祝持版進於神座前右。東向跪讀祝文曰。大正十一年。歲次壬戌。自先聖夫子歿。周甲四十。歷年二千四百。懷德堂記念會於十月八日。設位於堂上。恭修釋菜之禮。敎授松山直藏爲祭酒。敢昭告于夫子曰。於懿

夫子。德合天人。憲章祖述。混混原泉。集而大成。乃定斯文。微言洪訓。垂萬億年。詩書六經。永存聖軌。忠恕一貫。盡性窮理。彝倫攸敘。實由夫子。緬維教澤。景仰无已。粤卜吉日。率同諸生。祗修舊典。昭告丹誠。蒸羞既奠。筐鏞鏘鏗。神尙聽之。鑒此潔精。祝興奉進版於神前。（饌案上）退復本位。獻再拜。初讀祝文訖。樂作。（奉進祝文萬歲樂）樂止。贊禮引獻。詣殿上。南方。北面立。一祝取爵於坫。詣尊所奠案上。執尊舉罍授尊。祝受尊酌醴齊。持爵進詣獻之前。獻再拜受爵。跪祭酒。啐酒奠爵。俯伏興。初獻詣殿南時。執俎・執籩入饌所。受俎籩升殿。立北方。一祝先引執籩。詣神前。樂作。（飲福受胙三臺宴）取米黍稷飯。以飯籩授獻、獻受授執籩。次一祝引執俎。詣神前。跪取右俎肉。以俎授獻。獻受授執俎。跪取爵。遂飲卒爵。祝跪受爵。興復於坫。獻俛伏興。贊禮引獻。降復位。樂止。執俎・執籩隨降。復入饌所。奠俎籩。而後復本位。祝徹三俎。置案左訖。出階上。向贊唱一揖。贊唱答揖曰。賜胙。再拜而唱再拜。衆在位者再拜。（獻無拜）樂作。（撤饌送神還城樂）樂止。贊唱唱再拜。衆在位者皆再拜。贊禮進獻之左。東向白禮畢。遂引獻出。掌事・執饌・執俎・執籩・聽講生・協律・樂人以次出。贊引引監祀・副監。祝・執尊降殿。執洗・執篚・執罍進詣殿下。復故位。列三側。東向立。贊唱先再拜。監祀以下皆再拜。以次出。

享獻執役者

獻	教授	松山直藏
贊禮	聽講生	大阪金太
贊唱	同	岡田玄碩
監祀	同	坂田廣吉
副監	同	小松熊之助
祝	同	小沼量平　飯島溜三郎
執尊	同	野口幸雄
掌事	同	井上正美　太田勘兵衞
執饌	同	山本檜信　高砂清七
	同	高梨一雄　中川幸三
	同	不破重三　平野得三
	同	石井宗一　森口定藏
執俎	同	岩淵賢治
執籩	同	竹田義一
贊引	同	青木　潤　片野織平
執洗	同	宇野新造
執篚	同	山本又一
執罍	同	河島正一

鑑賞一首

仲田應弘

我にのみわかるゑまひを須臾見せて妻が卵を割る朝の卓

これは八月號高嶺の飛松實君の歌で、夫婦の愛情の深さを滿たし得た佳作だと思ふ。「我にのみわかるゑまひ」は、前夜の濃やかな情景が彷彿として來るもので、かうまで裸になつて云ひながら、何ら淫りがましい感じがない老巧さ、心にくいばかりである。「須臾」の語も安易に流れ易いのだが、ここでは生動してゐる。四五句、清く澄み切つた空氣の中で、少しユーモアを含んだ妻君の、はち切れさうな動作が、卵の割れる音と共に快く響いて來る。欲を云へば「朝の卓」と固定して了つたのがをしまれる。取材としては、朝でいいのだが、再考の餘地がある樣だ。

曾て、「光」で、土岐善麿氏の歌「―安寢しませと去にし少女は」について、金子薫園先生が評されて、「謹嚴そのものの樣な思君」云云といはれたことがあつた。薫園先生の評定を、其の門下生だつた飛松君に當嵌めて、時代の隔りに微笑ましいのである。

過去の夢、未來の夢

山本楢信

事業には中心なるものがなければならないと思ひます。碩園西村先生が、嘗て、世道人心を維持するものは、斯の道より外にないといふことを、浪華留別の詩に記して居られます。懷德堂の中心は孔夫子でなければならないのではありますまいか。

先生は、懷德堂再建の當初、空堂に聖賢の書を講ずるといふことを、よく口にせられたと聞いてゐます。論語孟子の講義を始めたところで、時勢に合はないといふことで、一人も聽講するものがないかも知れない。たとい一人の聽講者がなくともよろしい、一人の聽講者もゐない講堂で、自分は聖賢の書物を講義するのだといふ、所謂、千萬人と雖も吾れゆかんの氣慨で、講堂を建立し、講義を始められたといふわけです。ところが、意外に聽講の申込みが多くて收容し切れないので、已むを得ず超過の申込みを斷わらねばならない有樣でした。講堂に溢れる聽講者を前にして講義を始められた先生のお顏が、目に

浮んでくるような氣がいたします。

先生の御講義は、關係の古典をさかんに引用して、聖賢存世當時の環境を髣髴として再現し、その章句を生き生きしたものに浮き彫りされました。同時に近頃の世間の話に引き當てて、意見を述べられました。時間になると、その日の講義の最後の章句を、聲朗朗と讀み、一揖して終られる習はしでございました。

その頃のことを憶ひ出しますにつけて、出來ますなれば毎週一回、それが無理でしたら、せめて月に一回、論語の講義を始められてはどうでせうか。

講演も勿論結構でございますが、古典を初めから終りまで通讀、精しい講義を聽く機會が殆ど皆無の有様ですので、却つて必要ではないでせうか。日は土曜の夜がよいと思ひます。若しくば日曜の朝と思ひます。武内先生のような緻密な研究で、孔夫子の時代に生れて孔夫子の教訓を、直接に聞く思ひのする講義と同時に、大阪といふ土地柄、石濱先生の論語講義のように、孔夫子が現代に生れられるとすると、どういふことを言ひ、どういふことをされるかといふ風なお話もあつて、いいのではありますまいか。講師によき人を獲るといふことは何より第一でございます。講義の時間は一時間半、講義後三十分ほど聽講者の質疑に對する、講師の應答があつてほしいと思ひます。愚問連發は困りますが、賢問賢答は益するところ少くありません。淺い狹い質問に對して、深い廣い應答があつて、ときには、講義そのものより啓發するところ、計り知れないものがあることもあります。場所は交通に便利な適塾でもよいのではないでしようか。人數の都合で他の場所をお選びになつてもよいでしよう。

いろいろ經營に辛苦なさつてゐること、お察しいたしますが、懷德堂として、先づ復興していただきたいものは、論語の講義です。罹災前のやうに、四書五經、詩賦歌集、和洋の古典の講義、學術講演、研究旅行と、次々に發展していつていいと思ひます。